

白氏文集 二十三 隋堤柳・上

加藤淳平

隋の第二代皇帝煬帝ようたいの名は、非道なる皇帝の意にして、隋の滅びて後、唐の人たちの名付けたる諡名なり。諡名のみならず。唐人の記したる歴史には、名君たりし父文帝を弑せしより始め、芳しからざること多し。客觀的に見れば、淮河より黄河に至る大運河を完成せるは、大いなる功績なれど、三次の高句麗遠征の敗戦、度重なる國內巡遊、最後に其の途次の、江都揚州に於ける「佚遊」と死等、後世に少からざる批難あり。こは、隋の亡國を憫れむ詩なり。

隋堤柳・上 隋堤の柳・上

憫亡國也 亡國を憫れむ也

隋堤柳 歲久年深盡衰朽 隋堤の柳 歲久しく年深くして 盡く衰朽す

風飄飄兮雨蕭蕭 風は飄飄として 雨蕭蕭たり

三株兩株汴河口 三株兩株 汴河の口

老枝病葉愁殺人 老枝病葉 人を愁殺す

曾經大業年中春 曾て經たり 大業年中の春

大業年中煬天子 大業年中 煬天子

種柳成行夾流水 柳を種え行を成して 流水を夾む

西自黄河東至淮 西は黄河より 東淮に至る

綠影一千三百里 綠影 一千三百里

大業末年春暮月 大業の末年 春暮の月

柳色如烟絮如雪 柳色烟の如く 絮雪の如し

南幸江都恣佚遊 南江都に幸して 佚遊を恣にする

應將此柳繫龍舟 應に此の柳將て 龍舟を繫ぎたるべし

紫髯郎將護錦纜 紫髯の郎將 錦纜を護る

青蛾御史直迷樓 青蛾の御史 迷樓に直す

海内財力此時竭 海内の財力 此の時竭く

(大意) 隋の煬帝が掘鑿した大運河の岸の堤には、柳が植樹されてゐたが、長い歲月が經ち、柳は古木となつて、すべて衰へ朽ちてしまつた。今風が飄飄と舞ひ上がり、雨が蕭蕭と降るのは、汴河との合流點の堤の上によつと残つた二、三株である。枯れかけた枝やわくら葉は、見る人を悲しみに堪へられない思ひに沈ませるが、此の柳も、曾ては煬帝の大業年間の春を生きたのであらう。彼の大業年間に煬帝は、大運河の流れを夾む兩岸に、柳の立木を植樹し、綠の柳立木が、西は黄河から東は淮河まで、千三百里續いてゐた。その大業の年號の最後の年、春が暮れんとする晩春の月、柳の色は烟りのやうに煙り、柳絮は雪のやうに風に飛んでゐたに相違ない。煬帝は北の帝都から、江都と呼ばれる揚州の町に來て、常軌を逸した遊興に耽けた。此の時、舳先に龍の飾りの附いた煬帝の乗り舟は、岸の柳の木に纜を繫いだことだらう。その錦の纜を繫ぐ指揮官は、紫の髯の將官、揚州の郊外の宮殿の迷路には、

美人の女官たちが日夜侍つてゐた。煬帝はこんな遊興に日々を送り、國の財力を費ひ果す。

(平成二十九年十月十日受附)